

◆実践問題23◆

(女流歌人である宮内卿の若き頃のエピソードである。)

この千五百番の歌合の時、院の上のたまふやう、

「今度は、みな世に許りたるふるき道の者どもな

り。宮内はまだしかるべけれども、けしうはあら

ずと見ゆめればなむ。かまへて、朕が面起こすば

かり、よき歌仕うまつれ」と仰せらるるに、面うち

赤めて、涙ぐみて侍ひける気色、限りなき好きの

ほど、あはれにぞ見えける。さてその御百首の歌、

いづれもとりどりなる中に、

Ⅰの和歌

薄く濃き野辺の緑の若草に跡まで

見ゆる雪のむら消え

1回目

2回目

3回目

4回目

5回目

草の緑の濃き薄き色にて、去年のふる雪の遅く疾

く消えけるほどを、おしはかりたる心ばへなど、

Ⅰのよう、

まだしからむ人は、いと思ひよりがたくや。この

人、年積もるまであらましかば、げにいかばかり

目に見えぬ鬼神をも動かしなましに、若くて失せ

に、
いとほしくあたらしくなむ。